

我が人生、相馬高校^(※1)高普第44回卒 今野 貴文^(※2)

平成17年4月、相馬高校を卒業して以来13年ぶりに教諭として戻ってきた母校。始業式・着任式での挨拶の時、昔の大勢の真っ黒の学ランマッコ坊主の男子の中に、少々見られたエンジ色の理数科女子の制服・・・という相馬高校の集会の印象が、いま目の前には学ランの色が違う男子と、女子が半数もいる状況。一瞬にして13年間で校舎も変わり共学になり制服も変わり・・・「浦島太郎は陸地に戻ってこんな思いをしたのか・・・」と、妙な感覚に襲われました。

かつて「誠実・剛健・博愛」の校是の下、進学実績と部活動実績で県内はもとより東北全国にその名を馳せた相馬高校。男子校時代の相高生として通学し、様々な強烈な個性揃いの先生方や先輩方や友達から影響を受け、伝統ある城下町の高校で「男子たるもの、〇〇とあるべき」ということを数多く学び、勉強に意欲的に取り組み知性を磨き、部活動で汗を流し人との交流を通して人間性を高める・・・本当に充実した3年間であり、私が相高を卒業後今日までの、様々な困難な場面や不可能を可能にしてしまうような屈強な精神を相高時代で養えたことに、本当に感謝している日々です。

さて私は、音楽に魅せられ音楽指導の道を志しました。この道でやっていくのに大きく影響を受けた中にバンド活動があります。現在は引退しておりますが、中学校時代から始めたドラムと共に、定期的ではありませんが相高時代はバンドにも熱中しました。男子校ならではの傾向で、ハードロックやヘヴィ・メタル系のバンドをやっている友達の影響で、ドラム叩きとしてロックの世界にハマっていきました。ピアノというメロディックな楽器と破壊的なドラムという楽器に携わっていたこともあり、クラシック音楽がベースのハードロックであり、当時大ブレイクしていたX-JAPANのYOSHIKIの影響を大きく受け、ピアノの弾き方やドラムの叩き方が変わりました。

高校3年間、充実した楽しい勉強の他に、吹奏楽部活動にも情熱を注ぎ込み中学校からやっていたトランペットを担当しました。楽器の個性が人間性に影響してしまうというのはよくあることで、トランペットという楽器は私を、単純明快直球勝負ストレートな主張(傲慢??)感情豊かで明朗な人間に変えました。私は性格上、音楽に関することは徹底しないと気が済まないもので、練習できるときは休憩もせずに徹底してやったため、楽器を吹きすぎてよく唇を切って血を流しながら練習したこともあります(流血の惨事状態・・・)。1年生の後半から学生指揮者としても大須賀^(※3)先生のサポートをさせていただいた経験は、現在の音楽指導に大いに生きています。

卒業して音大に入り、一転クラシック音楽を深く勉強する世界に切り替わり、音大でも様々な先生方や友達から影響を受けました。今でも当時の先生方に会う機会があって、その度に「お前は気性が激しかった。色々なことを改革するように学んでいた。大学のカリキュラムの方針にケチをつけたのはお前が初めてだ。しかし、現在のカリキュラムの基にもなっている。その開拓精神も城下町相馬高校の卒業生として考えれば納得できる。」。東京の先生方でも相高のことをよく知っている方がいたことは驚きでした。そして卒業後、音楽教諭としての道をスタートしました。



いわきでの辛い新採用の日々を経て音楽の教諭として戻ってきて、共学に変わって劇的に変化したのは音楽の授業と文化部活動の隆盛であると思います。当時の音楽の授業を振り返ると、各学年ごとに進め方は同じで、1学期はひたすらギターコードと楽曲の練習で実技試験、2学期はリコーダーで実技試験、3学期は創作で作曲した曲の「オリジナルコンサート」で実技試験という1年間でした。当時の恩師・大須賀芳雄先生は何度か歌の授業を試みたようでしたが、男子校・・・音痴や楽譜読めない生徒ばかりであきらめたようで、その代わり器楽の授業が圧倒的に多く、よくある「一斉に〇〇の曲を練習」は殆どなく、ギター、リコーダー、創作と個人個人の計画に沿って進めさせるというものでした。それで遊び始める生徒がいるかというと・・・誰一人いませんでした。黙々とそれぞれの自主課題をこなし実技試験に備えるという、現在の「個性の尊重」の指導を既に大須賀先生はなさっておられたのだと思います。

13年の時を経て恩師からバトンタッチされた現在の私の授業は女子が半数いて、当時はいなかった歌の好きな、あるいはピアノを弾ける男子（しかもかなりうまい！）も多いことから、1年間の前半は歌の授業を中心に進めています。そして後半は器楽中心に授業を進め2月下旬に器楽のミニコンサートを開催し、生徒の個性あふれる発表を見ることができて感銘を受けています。私が体験した恩師の授業に少しでも近づこうと努めていますが、あまりにも稚拙でなかなか近づくことができずにおり、赤面の至りでございます。その恩師も、今年度いっぱい定年退職を迎えます。いよいよ私がしっかりしなければならぬんだと、自分自身のことを猛省し、更に研鑽を積んでいかなければならないと痛感しています。

さて当時は男子校ゆえに、フルート、クラリネット、サクソフォーンなどの木管楽器の経験者がいなく、

・・・・・・・・ 中 略 ・・・・・・・・

共学となった現在は吹奏楽経験者の男子も女子も数多く入部し、男子校時代には考えられなかった難しい曲にもチャレンジできるまでになりました。しかし、楽器の備品は男子校時代のまま・・・借りるあてもない楽器をどうするか、常に頭を悩ませている毎日です。

また私は「環境が人間性を育む」と考えており、部活動の生徒の学習との両立、挨拶、態度、服装、練習へ取り組む姿勢、集団生活の指導を徹底しています。実績を上げることは母校の発展に寄与する上で重要なことですが、同時に教育の場である以上、人間性の教育にも力を入れています。市民の前に数多く出て行く吹奏楽部が相高生を市民に印象づけることは多くあり、その場限りで何とかしようとしてもすぐに化けの皮がはがれます。何より母校・相馬高校の印象を市民の皆様によく持っていただきたい、その一心で指導しています。

男女共学化によって相馬高校は、新たな時代に入ったと思います。以前の校是「誠実・剛健・博愛」を確実に受け継いでいる男子と、知的で明朗な女子のバランスがうまくとれている共学校へと完成しつつあります。本当に素直でいい生徒ばかりで、理解あるいい同僚の先生方にも恵まれ、毎日の授業や部活動が充実しております。以前の男子校時代に当たり前だったことが殆ど通用しなくなっている・・・だからこそ新しい発想で学校の創造に貢献できればと考えています。OBとしては少々寂しい気がしますが、学校はその時代の現役生のためにあるものであり、私はOBである教員として、相馬高校の新たな発展に向けて陰ながら支援していきたい・・・そのような気持ちでこれからも残された相馬高校での勤務を全うしていきたいと思っています。

(※1) 創立110周年記念誌『紅の旗』(2009(平成21)年1月発行)「思い出の記」(ああ、我が青春の日々よ)より

(※2) 平成4(1992)年卒、中村出身。

(※3) 大須賀芳雄。昭和56(1981)年～平成4(1992)年、相高教諭(音楽)。